



色づく景色

avi

また桜の季節だ。駅から会社までの途中で陽子は立ち止まった。道路の両脇には、見事なアーチを描いた桜の木が揺らいでいる。月曜日だからだろうか、憂鬱そうな顔をしたサラリーマン達が立ち止まった陽子を黙って追い越していく。

大学を卒業して五年、いつからか一年の周期が早くなった。二十代はあっという間に過ぎるとは良く言われてきたが、それにしても早過ぎるような気がした。しかも特にたいしたことはしていない。こんなに薄っぺらい人生なのだから、せめて時間くらいゆっくりと流れてくれてもいいはずなのに。もう少しそんなどうでも良いことを考えながら立ち止まっていたかったが、腕時計は遅刻しそうな時間を示している。不意に全てを放り投げだしたい衝動に駆られるが、結局いつも通り足は会社に向かっていった。

就業を知らせるベルが鳴る直前、陽子は自分の席に滑り込んだ。

「おはようございます」

目の前の資料越しに橘修太の声が飛んだ。

「あっ、おはようございます」

遅刻寸前だったのを見抜かれたようなタイミングだったので、少し慌てて返事をしながら橘の顔を盗み見たが、既に視線は資料に落ちていた。意識しすぎた自分が恥ずかしくなり、鞆を机の下にさっと押し込みPCの電源を立ち上げる。

橘修太。年は今年で三十歳なので陽子より三つ年上にあたる。今年の初めに資材部から営業に異動してきた若手だ。まあ若手といってもあくまで会社内の話であり、他の会社に行けば、もう中堅と呼ばれてもおかしくない年頃であった。仕事において非常に評価の高い橘であったが、陽子は橘が何を考えているか分からないことが多く苦手としていた。いつも淡々と仕事をこなし、人当たりも悪くなかったが、プライベートが想像できなかった。大抵の場合、人となりを読み取ることは自信がある方だったが、橘の場合あまり表情を変えないこともあり酒を飲んでいる姿も、女性とベッドインしている姿も想像できなかった。そもそも既婚がどうかも知らない。指輪をつけていないところを見ると未婚のようであったが、それも定かではなかった。

「前田さん」

ふと橘から声をかけられ我に返る。余計なことを考えている時に呼ぶとは、もしかしたら橘はエスパーなのかも知れないと陽子は疑った。

「はい、すみません」

「週末お願いしていた売上管理資料の件、進捗どうですか？」

その資料は先週の木曜日の午前中に依頼され、おおよそ二日、つまり本日月曜日までかかるだろうと自分の中で踏んでいた資料だったが、金曜日の夕方には出来上がっていた。金曜日は橘が外出中であったため提出できなかったが、今日すぐに提出するつもりだった。

「はい、できています。あとはこの部分だけ橘さんに入力してもらいたいですけど」

そう言うと橘は少し驚いたような表情を浮かべた。珍しく分かりやすいアクションをとらせ

たことに陽子は快感を得ていた。

「あっそうですか、ありがとうございます」

橘は立ち上がり陽子からプリントアウトされた束を受け取った。中身を確認している橘の様子をもう少し見ていたかったが、ご主人様からの評価を待っている子犬のように見られたら恥ずかしいので、すぐに席に座りPCのディスプレイに目を移した。とはいえ陽子にとって今回の資料は内容も橘の希望通りになっている自信があったので、気分は子犬の気分であった。何か一言でもくれないかと思いながら新規メールを立ち上げ、ちょっとくらは褒めてよ、と書き込み宛先のないメールの送信ボタンを押してみる。行く先を失ったメールは少しだけさ迷うと、すぐに未送信ボックスに吸い込まれた。

「あっ前田さん」

再び橘から声がかかる。まさかメールが本当に届いてしまったのではないか、陽子はメールボックスを再び確かめる。

「この資料、データでも送ってもらって良いですか？」

メールが届いていなかったことに安心しつつも、またも絶妙なタイミングで声を掛けてきた橘を少しうらめしく思った。

「あっはい、すぐに送ります」

声に焦りが混ざっているのが自分でも分かった。陽子は慌てて未送信トレイに残っていたメールを削除すると、橘宛てのメールを作り始めた。

その日も橘が外出すると、特に急いでしなくてはいけない仕事もなくなった。陽子は終業のベルがなると、パソコンの電源を落としそそくさと席を立った。

また色のない一日が終わった。まだ陽も明るく景色は桜が色づくばかりであったが、陽子は自分の生活が無色透明に思えてしかたなかった。このまま三十路を向かえ老いていくのかと思うとどうしようもない不安に駆られたが、どうすればこの中から脱出できるかも分からなかった。

朝と同じようにぼんやり桜を見上げていると、視界の端から橘が歩いてくるのが見えた。

「お疲れ様です」

陽子が声をかけると、笑顔を浮かべて橘は右手を上げた。

「今日はもうお帰りですか？」

「はい。橘さんの仕事、今日は少なかったのでお先に失礼しちゃいました」

橘は苦笑すると、すみませんと小さく言った。

「いや別に文句を言っているとかじゃないですよ。それにゆっくり仕事ができただけから良かったです」

陽子はそう言いながら、言葉を付け足すほど嫌味に聞こえていくような気がした。

「そうですか、じゃあ前田さん仕事早いしもう少しお願いしちゃっても大丈夫かな」

「そんなことはないですよ、今の仕事量で十分です」

そう言いながら、陽子の口の両端が少し上がる。

「いや先週お願いしていた資料、もう少し時間がかかると思っていたんだけど、金曜日には出来上がっていたんですね」

陽子は無言でうなずいたが、嬉しさが表情に出てしまっているような気がする。

「助かります」

そう橘は言うのと両手に持っていたバッグと紙袋を片手に集め、ポケットから携帯を取り出した。

「あの、前田さんの連絡先、念のため聞いておいてもいいですか？会社だと何となく聞きづらくて」

「えっ、あっ携帯ですね。ちょっと待ってください」

陽子は予想外の展開に驚きながらカバンを漁る。可愛いストラップの一つもついていないホワイトの携帯を開くと、赤外線を立ち上げた。

「あっ同じですね」

よくよく見ると、橘の黒い携帯と陽子の携帯は、色違いの同じ型番であった。連絡先を聞かれたことも意外であったが、そんなことを口に出していう橘も少し意外に感じた。赤外線のやりとりが終わると、パチンと音を立て橘は携帯を閉じた。

「では会社に戻りますね」

そう言い残すと橘は会社への道を歩き出した。陽子は携帯に新しくメモリーされた橘の番号とメールアドレスを確かめるとそのまま振り返った。

「お疲れ様です、頑張ってください」

橘は少しだけ振り返って右手をあげた。陽子は橘の後姿を見送ると、桜色の道を駅に向かって歩き出した。

それ以降、特に橘からメールや電話がくることはなかった。過度な期待をしている訳ではなかったが、社交辞令としてだけ聞かれたと割り切るのも少し寂しかった。とはいえ、お互い職場を離れてまで話すことが多くないことも事実であった。唯一話をする機会がある職場でも特に必要以上に話すことはなかった。

パソコンのキーボードを叩いていると橘の狭い額が小さく動く。時々その額に手を伸ばしたくなる自分に気づきながらも、恋と呼べるほどの気持ちを持っている自信がなかった。恋をしそうになると、いつももどかしい気持ちに襲われる。気になる人ができても自分の欠点が先に上がってきて、あまり積極的に話すことができなくなる。そして最終的には面倒になってしまう。この五年ほど同じスパイラルに陥り抜け出せなくなっていたが、抜け出す勇気がない自分が痛いほど分かっていた。

定時のチャイムが鳴ると、特に片付けなくてはいけない業務もなかったので静かにパソコンの電源を落とした。橘は外出で十九時戻りになっている。

いつもと同じ道を通り家まで辿り着く頃には、もう既に陽は落ちきっていた。隣の家からは晩ご飯の良い匂いがする。ふとこれ以上どんな生活を望むのであろうという気持ちと、自分には何もないと思う、相反する気持ちが交錯する。傷つくのを避けるように陽子は家のチャイムを押

した。

「おかえり」

家に帰ると母がキッチンから顔を出した。

「ただいま」

「ご飯出来てるから食べちゃいなさい」

母はそれだけ言うとすぐにキッチンに戻っていった。部屋に戻ると疲れた体をベッドに横たえる。一瞬夜ご飯を放棄してこのまま眠り込みたかったがどうにか持ち直す。もう十年も変わらない自分の部屋。家を出るのも面倒になっていた。キッチンに戻ると母は既にご飯を食べテレビを見ていた。

「ご飯、テーブルに乗ってるから」

テーブルにはしょうが焼きとご飯とお味噌汁が並んでいる。母はあまり料理にこだわる人ではなかったが、作る料理はどれもおいしかった。今はこの料理を当たり前のように食べているが、もし一人で暮らしていたら、これを全て自分で用意しなくてはいけないかと思うとぞっとする。

「ねえ、しょうが焼きって作るの難しい？」

陽子が尋ねると母はきよとんとした顔をしていたが、簡単よと一言残して視線はすぐにテレビに移った。ただあなたには難しいかもね、と背中越しに余計な一言を放ることも忘れなかった。陽子はため息をつき、テーブルに置かれたしょうが焼きに箸を伸ばした。

「ただいま」

陽子のご飯を食べ終わりテレビを見ていると弟の隆太が帰ってきた。

「おかえり、ご飯食べるんでしょ？」

母の問いかけに隆太がうなずくと、テレビを見ていた母は立ち上がりキッチンに向かった。テレビでは見ていたドラマがクライマックスを向かえていた。

「隆太、大盛りでいいの？」

「うん、大盛りでお願い」

隆太が答えると、母は新しくしょうが焼きを作り始める。ドラマは主人公役の俳優が今にも女性にキスをしようとしているところだ。母は子供たちが帰ってくると、何をしても玄関に顔を出してくれるし、ご飯も用意してくれた。陽子は目の前のドラマを見ながらぼんやりとそんな事を思い出す。

「偉いよね」

陽子は気づかず呟いていた。ふと振り返ると母が黙々と食卓の準備をしている。聞こえていなさそうで安心する。

「お母さんドラマ見なくていいの？」

母はしょうが焼きを作っているフライパンを一度置き振り返ると、テレビに目を移した。

「そのドラマね、あんまり面白くなかったのよ」

母は少し笑ってそう答えた。

お風呂に入って部屋に戻るとベッドに倒れこんだ。天井を見上げながら自分が母のようになれるか考える。毎朝父と同じ時間に起きては家族の料理を作り、洗濯をし、全員が出るのを見送った後に自分もパートに出る。帰り際に買い物をすませ、皆が帰ってくるまでには洗濯物を取り込み料理を作る。正直いって今の自分に他人の分まで背負う余裕は全くなかった。そう思うと急に何もしたくなくなる。明日会社に行くことも、週末に遊びに行くことも、急に虚しいことのように思えてくる。いつもそうだ。他人と比べては自分のできない部分だけ肥大させ、いたずらに自分を追い込む。どうにかなるさと楽天的になればどんなに楽かと思う。しかし陽子には無理なことであった。こんな自分を橘はどう思うだろうか。せめて顔が可愛くスタイルが良かったらもう少し自信が持てたと思うのだが、客観的に見て平均点以上の点数はつけられそうになかった。体をベッドから起こし鏡台と向かい合う。自分が橘だったらきっと好きになれないような気がする。陽子は手で自分の顔を覆い電気を消すとベッドに潜り込んだ。とりあえず明日までは何も考えたくない。そう思いミュージックプレーヤーのイヤホンに突っ込んだ。

特別なことが起きない週末がまた過ぎ、嫌な月曜日がやってきた。ただ不思議なもので会社に行くまでは嫌な気になっても、行って仕事を始めてしまうと働くこと自体は苦痛でなくなる。むしろやればやるだけ橘に認めてもらえるような気がしてやる気は出てくる。陽子はキーボードを叩きながらどんどん集中していく自分を感じていた。

「前田さん」

不意に橘に名前を呼ばれる。

「はい」

「あっようやく聞こえた、どうしたんですかそんなに集中して」

呼ばれても気づかない程集中していたようだ。しかも橘から呼ばれていたのに気づかなかった自分が残念だった。

「今週の金曜日、隣の部の吉川と花見に行こうって話になっているんですけど、良ければ来ませんか？」

急な誘いに驚き周囲を見渡すが、いつの間にか部内には陽子と橘しかいなくなっている。

「そうですね、行ってみたいですけど、私が行っても大丈夫なんでしょうか」

誘われたことは嬉しかったが、陽子は橘の真意を図りかねていた。

「隣の部の岸田さんも来るって言っていて、女の子が二人だとバランスも良いしどうかな？」

隣の部の吉川猛と岸田由里子という組み合わせを聞き、今回の誘いの真意に合点がいった。そしてその真意は快いものではなかったが、折角橘からもらった誘いを断るまでに不快なものでもなかった。

「はい、私で良ければお邪魔します」

橘は陽子の返答に安堵の表情を浮かべた。

「良かった。では十九時に会社を出る感じで」

「了解です。先に上がれそうだったら何か買出し行っておきましょうか？」

橘は一瞬考えるように首を傾げた。

「いや、折角ですし一緒に買出し行きましょう」

「そうですね、じゃあまた出る時に声掛けてください」

了解ですと言い残し、橘は向かいのデスクに戻った。陽子はその日、それ以上集中できなかった。

それから一週間が過ぎていくのが遅かった。毎日時計を見ながら何もない今日が早く終われば良いと呟いた。当日は朝からあまり仕事に身が入らなかった。そんな日に限って仕事量が多くなく、一日中時計を見て過ごした。時計が十八時半を指し陽子は少しそわそわし始めたが、まだ橘は業務に集中していた。いよいよ時計が十九時を指そうとした時、橘が口を開いた。

「そろそろ行きましょうか」

陽子は頷くと慌てて机の下から鞆を取り出した。

「お先に失礼します」

二人で揃って周囲に声を掛けていく。エレベーターホールに向かう途中、部長に鉢会うと部長はにやけた顔で口を開いた。

「おっデートか？」

「そうですデートです。お先に失礼します」

違いますと陽子は言おうとしたが、橘は笑顔でそう言う通り過ぎてしまった。相変わらず陽子にはつかめない人であった。

会社の玄関を出て少し歩くと吉川の姿が見えた。後ろには由里子の姿も見える。

「よおお待ちせ」

橘が芳川に声を掛ける。

「お疲れ、よく出られたなこんな時間に」

「遊びはきちんと間に合わせますよ。折角の金曜日に仕事なんてもったいない」

吉川は笑うと橘の肩を叩いた。吉川は他の社員が着ないような、グレーのジャケットにチノパンというカジュアルな服装をしていた。顔は良いと思うのだが非常に軽いという噂もよく聞いたことがあり、あまり信用はしていなかった。なおかつ最近吉川の部に異動してきた由里子を狙っているという噂も耳にしていたので、それに巻き込まれるのは良い気分ではなかった。

「岸田さんもお疲れ様。仕事大丈夫だった？」

「はい、大丈夫です。有難うございます」

橘がフォローするように尋ねると、由里子は大きな目をぐるりと回し笑顔で返事をした。

「前田さんもお疲れ様」

橘の後ろに隠れるように着いてきた陽子にも吉川が話しかける。

「お疲れ様です。誘って頂いて有難うございます」

「いやいや、女の子は多いほうが楽しいからね」

吉川はイメージに違わない返事をした。

「橘さんと遊びに行くの久しぶりですね」

「そうだね、岸田さんが異動した時の送別会以来かな」

由里子と橘の会話に陽子は驚いた。

「橘さんと岸田さんって、前は同じ部だったんですか？」

「そうそう。前は資材管理部で一緒だったんだよ」

「橘さんには当時すごくお世話になって、今でも尊敬しています」

由里子が軽い口調で言うと、橘は苦笑した。それを聞いて陽子は、改めて一人勝手に分からない所に飛び込んでしまったことにナーバスになった。

会社から数駅電車に乗ると、桜の名所の最寄り駅にたどり着いた。駅前のスーパーで買出しをして数分歩くと、川べりの両側に美しく並ぶ桜が見えてきた。金曜日ということもあり多くのサラリーマンで賑わっている。辺りを見回してもほとんど座る場所もなかったので、吉川と由里子、橘と陽子がそれぞれペアになり席を探し始める。五分程経つと吉川がスペースを見つけたと駆け寄ってきた。その場所に向かうと、明らかに由里子が用意していたであろう可愛い花柄のシートが既に敷かれていた。陽子は花見に誘っておいてもらいながら、こういったことに気が回らなかった自分に溜息が出た。

「さすが、仕事が早いね」

橘が吉川を持ち上げる。

「いやいや由里子嬢のここですよ、ここ」

吉川はそう言って由里子の二の腕を軽く叩いた。

「有難うございます、場所とかシートとか。気が利かなくてすみません」

「気にしないでください。昔からこういう場所見つけるの得意なんです」

陽子が謝ると由里子は明るく笑った。他意のない彼女の笑顔は同性から見ても可愛らしかった。

「よし、じゃあ早速乾杯といきましょうか、橘ビールは？」

「おう、これだこれ。冷えてるからどんどん飲もう」

陽子は少しでも手伝おうとおつまみの袋を開け始めた。全員にビールとおつまみが行渡ったところで乾杯をすると、吉川と橘の缶はあっという間になくなった。そして話は二人の同期話に花が咲いた。新入社員の時からのお互いのエピソードや、二人でバカやった話を聞いていくと二人の性格が段々と見えてきた。どうやら吉川は見た目と裏腹に、仕事は非常に優秀らしい。陽子は知らなかったが吉川は現在三期連続で部内の売り上げナンバーワンとのこと。しかも国立大卒という秀才ぶりであった。吉川の話を知っていると、ふざけた話をしたと思ったら、真面目な話を分かりやすく話してくれるなど、頭の良さを確かに感じた。

逆に橘は一見硬く見られがちだが、飲んで騒ぐ回数は吉川より圧倒的に多いらしい。気心の知れた人とししか行かないらしいが、酔った後にカラオケに行くとマイクを離さないタイプと聞いて陽子は思わず笑ってしまった。また仕事は吉川同様に優秀で確実なのだがたまに大きく抜けることがあるらしく、重要な社内会議を忘れてインドに旅行に行っていたという伝説まであるらしい。

「いやあの時は焦ったよね。後輩に何かあったら連絡くれってメアド残していったんだけど、インド入って三日後くらいにネットカフェでメールチェックしたら、後輩から十分単位くらいでメール入っててさ」

「大野だろ、その時メール送ってたの？あの時のあいつは本当に可哀想だったよ。何故かあいつが部長から怒られてたし」

「そうそう大野」

二人が声を上げて笑うと、由里子と陽子もつられて笑う。

「それで帰ったら怒られたんですか？」

「ものすごく怒られましたよ。成田で早速携帯の充電がなくなりました」

由里子の問いに橘が答えると、また皆が笑った。

「なんか普段の橘さんと」ギャップがあって信じられないです」

陽子がそう言うと、吉川がニヤリと笑って橘の肩に手を回した。

「こいつはそういうギャップで女にもてようとするんだよな」

「別に狙ってやってるわけじゃないよ」

橘が反論する。

「でも社内に橘ファン結構いますよ」

由里子も助け舟のようで助け舟ではないコメントを挟む。由里子の言葉を聞いて、なぜだか陽子の胸が落ち着かなくなった。

「本当？俺はそんなの聞いたことないけど」

「そんなの本人に言うわけがないじゃないですか。そもそも橘さん彼女いるんじゃないですか？」

思いがけず由里子が陽子の聞いてみたかったことをズバリと聞いた。

「いないいない。もうかれこれ三年はいないよ」

「なんでおまえが答えるんだよ。間違っちゃいないけど」

勝手に答えた吉川に橘は文句を言ったが、陽子は素直に教えてくれた吉川の存在は有難かった。

「でも三年もいないなんて意外ですね」

陽子が率直な感想を述べると、由里子も同調した。

「そうですねモテるのに」

そう言うと橘は少し困ったような笑みを浮かべた。

「なんでだろうね。そろそろ頑張らないと、とは思っているんだけどね」

橘は逃げるように後ろを振り返り、缶ビールを探した。

結局三時間ほど飲みながら話した後、吉川と由里子はカラオケに行き、陽子は終電も近かったので帰ると言ったら、同じ方向の橘が送ってくれた。帰りの電車で二十分くらい一緒になるので嬉しい反面、何を話したら良いかと思うと緊張した。

電車は金曜日の遅くということもあり、多くの酔っ払いが充満していた。当然座る場所などないので、座席の目の前に二人並んで座る。地下鉄の暗い窓に二人の姿が反射して映る姿を見ると、二人で話しているという意識が強まりさらに緊張した。意味もなく電車内の広告など眺めていると、橘からふと声があがった。

「すみません、こんな遅くまでつき合わせちゃって」

「いえ、大丈夫です。今日は誘っていただいて有難うございました。楽しかったです」

「とんでもないです。楽しんでもらえたなら良かったです」

一旦会話が終わると騒々しい社内に沈黙が流れる。陽子は沈黙が嫌いではなかったし友人との間でも率先して話題を作っていたりはしなかったが、その時は何かを喋らなくてはという気持ちが先行した。

「カラオケ行きたかったですよ？こちらこそすみません、送ってもらっちゃって」

「いやいやあのまま行くと大体明け方までのペースになっちゃうんで、引き際が大切なんですよ」

橘は笑って言った。

「橘さんはお休みの日、何していることが多いですか？」

陽子は頑張っって聞いてみる。

「僕ですか？何と言われると何もしていませんけど、フットサルですかね」

「フットサル？」

「小学校の頃からずっとやっているんで、なかなか止められないんですよ」

「いいですね、そういう体を動かせる趣味があって」

「まあ仲間内で集まる代わりというのもあるんですけどね。前田さんは何をしていることが多いんですか？」

そう橘に聞き返されて、陽子は自分のした質問に後悔した。休みの日に特に何をするでもなく、家事を手伝う訳でもなく、ぶらぶらとしている自分を説明できなかった。

「そうですね、友達と遊びに行ったり家でテレビ見たり、録画したドラマ見てたりすることが多いですね。なんていうか何もしてないです。」

「そんなことないですよ。僕もそんな感じです」

それでもフットサルが好きだと言い、休みの日に打ち込むことがある橘が陽子は羨ましかった。橘を無表情だと思っていたが、今日一日一緒にいただけで彼の多くの表情を盗み見たような気がした。

「もし時間あれば、今度フットサルやってみませんか？うち男女混合なので」

橘の突然の誘いに陽子は驚いた。

「フットサルですか？私サッカーとかやったことないんですけど・・・」

「初心者でも大丈夫ですよ。女の子は皆初心者なので」

普段なら確実にお断りするお誘いであったが、橘が打ち込んでいるものに興味はあった。少し酔っ払っていたこともあるのかも知れない。陽子はなぜか知らず知らずのうちに試してみようと思っていた。

「そうですか、最初は見学しながらで、大丈夫そうなら参加するって形でも大丈夫ですか？」

そうはいつでも、全く新しいことに挑戦するのは腰がひける。

「全然問題ないですよ。じゃあ明後日の日曜日とか都合はどうですか？」

「そんなにすぐですか？」

陽子は思わず口にする。

「あっそうですよね。すみませんせっかちで」

「あっいえ、すみません。そうじゃなくてちょっと心の準備ができてなかったの」

陽子は口ごもったが、行くなれば次週に引き延ばす必要はなかった。いつもなら保留してしま

う自分を叱咤激励する。

「でも、行きます」

「あっでも次の週とかでも大丈夫ですよ。焦らせちゃいましたよね」

橘も陽子の勢いに少し驚いたような口調になる。

「大丈夫です。日曜日はちょうど何もなかったし、フットサルってシェイプアップにもなりそうじゃないですか」

そう答えると橘はニコツと笑い、痩せる必要はないですよと返した。それと同時に橘の最寄り駅のフォームが近づいてくる。

「じゃあ詳細は明日メールしますね」

フォームを降り橘がそう言い終わると、ドアが二人の間で閉まった。橘は軽くこちらに手を振ると階段に消えていった。

日曜日、朝から陽子は憂鬱であった。正確にいうと土曜日の朝起きた時点から陽子は後悔していた。勢いに任せて行くと言ってしまったが、この十年程まったく体を動かしていない自分に到底フットサルができるとは思わなかったし、化粧のとれた顔を橘に見られるのも嫌であった。いざとなったら見学だけということも考えればいいと自分に言い聞かせ、どうにか後悔を和らげていた。親に色々と詮索されるのも面倒だったので、鞆にスポーツ用の服や靴を見えないように詰め込みこそこそと家を出た。向かうのは億劫であったがもう逃げられるタイミングではなかった。電車をいつもとは違って都心とは別の方向に乗ると、いつもよりのんびりした景色が流れていった。

そんな憂鬱さが無駄に思えるほどフットサルは陽子が思ったより、いやそれ以上に楽しかった。最初は見学して様子を見ようと思っていたのだが、メンバーが不足し陽子も最初からメンバーに加えられたのだった。三チームあったので一試合目はプレーせず、一緒のチームになった橘にコートの外から色々と教えてもらった。それによりある程度雰囲気はつかめたが、いざゲームになると緊張して空振りするなど散々であった。それでも元々バスケットを中学までやっていた陽子の体は小さなコートの中での駆け引きは憶えているらしく、しばらくゲームを重ねるうちにオフェンスやディフェンスの要領は得てきた。しかし数試合もするとここ数年ほとんど使っていなかった足が悲鳴を上げ始め、しばらくすると陽子は動けなくなった。

休憩の時間になると陽子はコートに倒れこんだ。上を見上げると青い空がおでこの上まで広がっている。汗がしたたり落ち化粧もすっかり落ちていたが気持ち悪くなく、頭は不思議と冴え渡っていた。いつも余計なことばかり考えていたので、今のように余計なことを考える暇もなくなると、頭が軽くなるのかも知れない、陽子にはそう思えた。スポーツをするということが、走るということが、こんなにも楽しいものだということをすっかり忘れてしまっていたような気がする。橘や他の女性から、初めてだけど良かった、などと声を掛けられたことも陽子は嬉しく感じていた。

結局フットサルが終わった後もメンバーと食事までして遅くなったので、橘が家まで車で送ってくれることになった。化粧をし直した陽子は素に戻っていたので車内ではあまり多くは喋れなかったが、二日前の電車であったような緊張感は抜けていた。国道の対向車線には絶えず光が走り抜けていく。

「今日は有難うございました。意外にもっていうと失礼ですけど、すごく楽しめましたフットサル」

橘は陽子の言葉に驚いたように小さく振り向く。

「あっそうですか、良かった。前田さんちょっと表情が硬かったから、振り回して機嫌損ねちゃったかなって心配していたんだけど」

橘はさらっと陽子が驚くことをいった。

「そんなに表情硬かったですか？今日は本当に楽しかったですけど」

「いやそれなら僕の目が悪かったんだと思います」

弁解するように橘は左手を振る。

「あっなんか今の言い方、すごい嫌な女ですよ。すみません、そんなつもりじゃないです」

そう陽子が返すと、橘は大丈夫ですよと笑って言った。

「多分本当に表情が硬かったと思うんです。普段からあんまり可愛げがないんですよ、わたし」

電車と違ってガラス越しにお互いの表情が移らないので、いつもより素直に話せた。

「そうかも知れないですね、最初僕も前田さん怖かったですもん」

「そうなんですよ、どうにか直したいんですけど駄目なんですよ。あんまり人とうまく接する自身がないからそうなっちゃうんだと思います」

橘は小さく相槌を打つ。

「本当は陽子って名前も好きじゃないんです。明るくもないのに陽子って皮肉だなんて。」

隣からもう一度相槌が聞こえる。

「でも今日は久しぶりに全速力で走って、そんなことをうじうじ考える暇もないとこんなに気が楽だなんて初めて知りました。そう意味ですごく感謝しています」

「そう言ってもらえて嬉しいけど、でもそんな深く考えることないですよ。僕だって自分の嫌いな所がいっぱいあるよ。自分が関心持てないことに対して、すごく気持ちが乗らないことを表情に出しちゃったり、あんまり自分に自信が持てなかったり」

陽子も黙って頷く。

「それを人に見せまい見せまいと思って日々過ごしていると、自分がどこにいるのか分からなくなったり。でもそんなのは皆あることだと思うから、過剰に考えない方がいいかもよ。前田さんは十分明るい子だと思うし」

そう言い終わると同時に車が赤信号で停車した。橘は陽子に顔を向ける。陽子もつられて橘の方を見る。目があつた瞬間、橘にキスをされるような気がした。数秒がスローモーションのように過ぎる。その間陽子は頭の中でいくつものジレンマに陥る。頭が出す答えはノーであったが、体が出す答えはイエスだった。

「僕も前田さんの意外な一面を見れて良かったです」

しかし橘の唇の位置は動かず、笑顔と共に優しい言葉だけが返ってきた。陽子は心臓の鼓動がはっきり聞こえていた。緊張がピークに達しており何も答えられない。そんな陽子を尻目に、橘は信号が青に変わった国道の上で再びアクセルを踏みなおした。

「実はこの間の吉川と岸田さん、付き合ってるんですよ。前田さんと飲みに行ってみたって吉川に言ったら花見に皆で行こう、ってすごくけしかけられて。でも今日もこの前も意外な一面が見れたので誘って良かったです。また今度誘ってもいいですか？」

そう尋ねた橘の言葉に、はいと答えるしか陽子に余力は残されていなかった。

家に帰ると二十時を過ぎていた。明日も朝から会社だが全く嫌にはならなかった。食卓に母が座っていたのでその隣に腰を下ろした。

「おかえり」

「ただいま」

いつものやりとりが過ぎると、母は再びテレビに視線を戻した。

「ねえお母さん」

「なに」

「私、今度から一人暮らしすることにした」

母は少し驚いた表情をしたが、そうとだけ答えた。

「もう少し細かく決めたらまた言うよ。お風呂入ってくる」

そう言って部屋を出ようとした陽子の背中に母の声が届いた。

「まずやってみることは大事よ」

その母の言葉に陽子の笑みがこぼれた。

「私もそう思う」

部屋に戻って荷物を置きお風呂の準備をしながら、陽子は橘に送るお礼メールの内容を考え始めた。